

第一朗読：出エジプト記(出エジプト 16・2-4、12-15)；わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる

答唱詩編：(詩編 78・3+4、23+24、25+54)；神のわざを思い起こそう、力ある不思議なわざ。

第二朗読：使徒パウロのエフェソの教会への手紙(エフェソ 4・17、20-24)；神にかたどって造られた新しい人を身に着けなければならない

アレルヤ唱：(マタイ 4・4b)；人はパンだけではなく、神のことばによって生きている。

福音朗読：ヨハネによる福音(ヨハネ 6・24-35)；わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない

今日の福音では、五千人がパンを食べた翌日に、今日もまたパンをいただくとして集まった群衆がイエスを捜してカファルナウムに来たところから始まります。五千人にパンの奇跡を示したイエスの意図は、神がわたしたちに無償の愛を注いでくださっていて、どんなに苦しいときにも父である神はわたしたちを見捨てないということを知ってもらうためでした。しかし、群衆はイエスの意図を理解せず、自分たちの目の前で見た物質的なパンを再び求めてやってきました。そこでイエスが群衆に言っているのは「神の恵みがわたしたちにただで与えられているのだから、そのために働きなさい。それによって永遠のいのちに至ることができるのですよ」ということです。

永遠のいのちとは神を知ること、イエスを知ることによることだとヨハネ福音書のほかの個所に書かれています。本当に人生を動かすものとは何かを考えてみると分かると思います。わたしたちは生きている間、神の恵みを受け入れることも、拒否することも自由に選べます。どのように生きることもできるのです。しかし、死によってその自由は終わります。死の瞬間にすべてが決まり変えられなくなるのです。そして神の裁きか神の救いを受けることとなります。

神を受け入れる人生を送っていないと、死の間際に神を受け入れる最後の決断をするのは難しいのではないのでしょうか。生きている間、いつも神の恵みを受け入れるように生活していれば、死のときにも神を受け入れるのか拒否するのかを間違えることはないでしょう。今日の福音ではそのためにどうすればよいかということは具体的に書かれていません。「わたしが命のパンである。わたしを信じなさい」と述べられているだけです。ですが、聖書のほかの箇所に書かれているイエスの生き方にならうことが永遠のいのちに至るのために必要なことであるということが分かります。

永遠のいのちに神がわたしたちを招かれるという恵みの一つとして召命があります。洗礼を受けたわたしたち一人ひとりが神の召命を受けています。その召命にわたしたちは応えていくということが神の恵みを受け入れるということです。それは永遠のいのちにわたしたちが気づかぬためなのです。召命は人それぞれの形で表れると思います。司祭「召命」というと司祭になる召し出しをまず思い浮かぶかもしれませんが、皆さんにもそれぞれの召命があります。それは、信徒として社会の中で働くことで示されることかもしれませんし、修道者となって祈りを通して働く道かもしれません。高齢になって体の自由がきかなくなったとしても、さまざまな経験を子どもたちや孫たちに伝えることができます。「召命」とは神がまったく無償でわたしたちに与えてくださる恵みなのです。パウロはエフェソの教会への手紙の中で、古い人を脱ぎ捨て新しい人を身に着けよと言っています。古い人とは自分優先に生きてゆく人のことを言うのでしょうか。新しい人とはまず始めに他人のために働く人のことを言うのでしょうか。神の恵みが無償で注がれていますが、それを受けるわたしたち一人ひとりの心構えが大切なのです。その招きに応えるのは皆さんそれぞれの意志によります。人生の中で自分は何をするよう神に招かれているのかを祈りの中で見つめていきましょう。